

# VI. 歴史イメージの形成——イマヌエル・カント

## VI-1 表象と実在の不一致

### ○ 《魔女》は虚偽のイメージでひとを惑わす



14世紀から18世紀にかけてヨーロッパで信じられた、異教の悪魔と契約した女性（男性）たち。ほうきによって空を飛び、ヒキガエルや奇怪な草を煮て毒薬を精製し、悪魔崇拝の集会に参加して乱交を繰り返す。1484年、教皇インノケンティウス8世により、「魔女たちへの鉄槌」（ドミニコ会の異端審問官シュプレンガーによって書かれた書物の表題）の必要が認められ、ヨーロッパ全域で魔女狩りと魔女裁判が横行。全欧で数万人が処刑されたと考えられている。身体はどこかに「契約の徴」をもつとされたが、魔女の判別（審判）は、実際は水責め（水槽に女を埋め、浮かべば魔女、沈めば人間、とするもので、溺死か魔女として処刑かの選択を強いられることと同じであった）など、過酷な拷問による強制的自白によった。魔女の嫌疑をかけられた

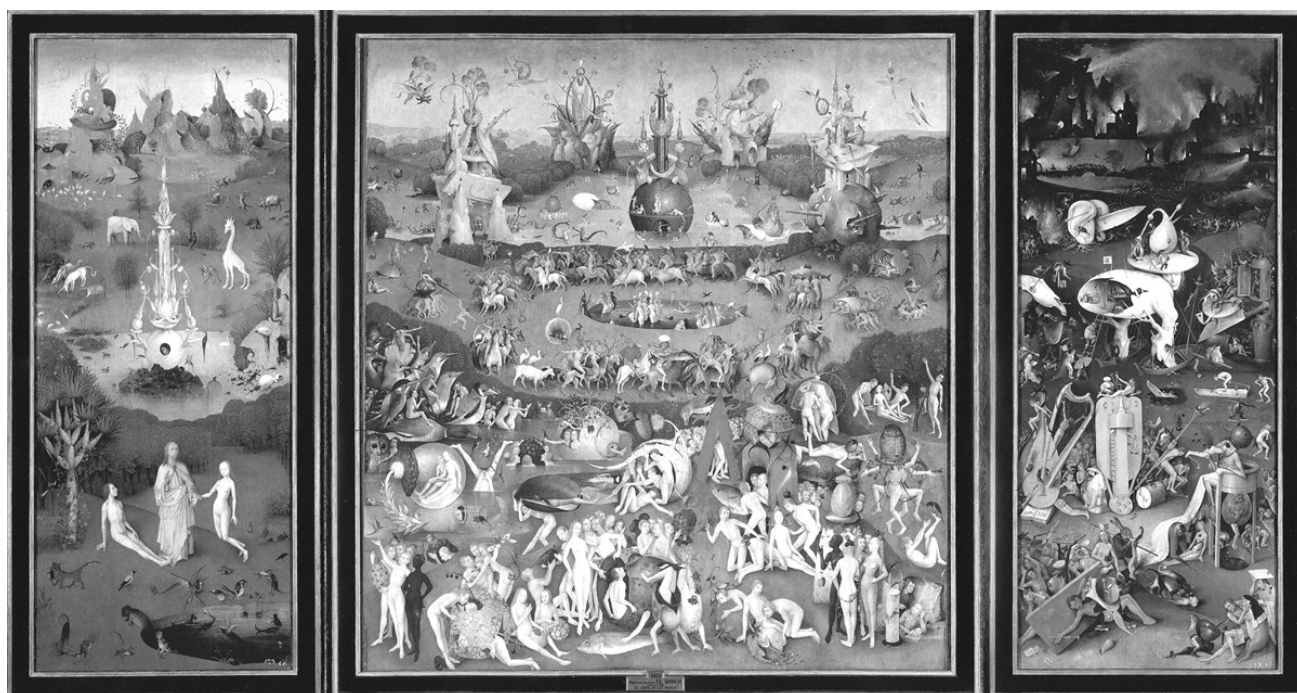
者は、自らが魔女でないことを証明しなければならず、拷問や処刑の恐怖のため、嫌疑の時点で自殺する者も多かった。教会裁判よりもルールの存在しない民衆法廷により、多くが火炙りにより命を落とした。

「小国の領主で同時に司教の職にある者たちは妖術が最良の収入のひとつになるので、猛り狂ったように焼きつづける。バムベルクのような、目にもとまらないほど小さな司教区で一度に六百人が焼き殺され、ヴュルツブルクでは九百人が焼き殺された！ そのやり方は簡単である。まず証人たちに拷問を用いる、苦痛、恐怖によってむりやり証人たちに被告に不利な証言をさせる。被告から責苦のあまり自白をとりつける、自明の事実を無視してこの自白を信用する。たとえば次の一例がある。或る魔女が、最近死んだ少年の死体を墓地から掘り出し、魔法の薬を作るのに使ったと自白する。その夫が言う、「墓地にいて下さい、子供はそこにいるから」と。掘り出してみるとたしかに子供はその柩のなかにいる。しかし、裁判官は自分の目で確かめたことに反して、これは見せかけであり、悪魔のあたえる錯覚であると決めてしまう。事実そのものより女の自白の方を選ぶのだ。女は焼き殺される。」（ジュール・ミシュレ『魔女』より）

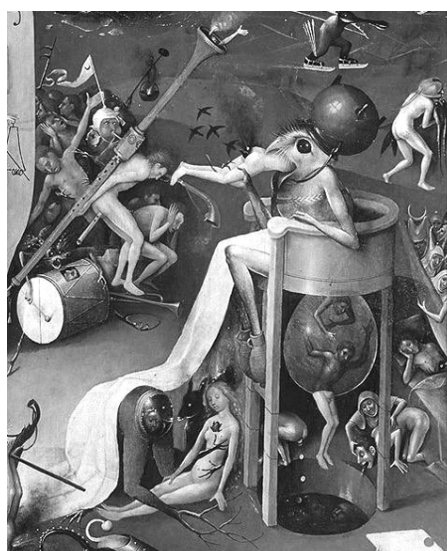
→ なぜ神は、それと判別できないふつうの人間を、異教徒や魔女として造ったのか？ 彼女は表象において完全に人間であるにもかかわらず、隠された実在においては《魔女》かもしれない……。

「悪魔はその領分をひろげている…神はその領分を失っている…神の創造した自然と悪魔の創造した自然とを見分ける目をもっていない人間にとって、いまや世界は神と悪魔に共有されている…澄んだ泉、白い花、小鳥、いったいこうしたものは神に属するものなのか、それとも、裏切りの模倣か、人間を捕えようと張りめぐらされた罠なのか」（同前）

→ 中世において、神の名のもとに調和していた表象と実在の分離（トマス・アクィナス的な実在論的神学の動揺）。実在が、終世変わらぬ自己同一性を保てなくなる。⇔神と神の創造した世界への懐疑



ヒエロニムス・ボシュ『快樂の園』(1500年頃)



『同』右翼パネル(部分)

「樹の人間」と「耳とナイフの戦車」(左)、人間を飲み込んで排泄する悪魔(右)。

- キリスト教会が排除し、抑圧していた要素が深いところで狂気として重層していた西欧世界。ルネサンス以後、知識層が古典世界の理性主義を再び受容していく一方で、教会秩序の崩壊は、西欧人の人間性に深刻な問題を投げかけていた。
- 教会秩序なしに、表象と実在の不一致をいかにして克服するか……？

## VI-2 レネ・デカルト(1596~1650)のコギト——独断的合理論

「われ思う、ゆえにわれ在り Je pense, donc je suis (Cogito, ergo sum)」

表象と実在の不一致が、あらゆるものに対する懐疑を生む。世界のすべてを疑う「方法的懐疑」が《われ》にさえ向かうとき、疑うという行為が可能であるかぎり、疑う《われ》が存在していなければならない。

- 神に基づく中世的秩序の崩壊を、《われ》によって回復しようとした。17世紀以降、ヨーロッパで絶大な影響力を誇る。自己同一性の回復。

○ デカルトがアプリオリに認めた三つの実在

- a. 【神】
- b. 【物体】（「延長」と呼ばれる）≡肉体
- c. 【理性】 = 《われ》（神により万人に平等に配分されている）≡心

→ 物体（実在）と、理性が知覚する表象とが、予定調和的に一致する。

→ 神や王、天皇や将軍（のような、庶民とは質的に異なると考えられる存在）ではなく、《われ》を中心とする均質な空間＝近代的思考の出発点。

VI-3 デイヴィッド・ヒューム（1711～1776）の批判——経験論

デカルトの認めた《われ》は完全なものではなかった。デカルトに対する数々の批判。

① デカルトの重力＝エーテル説からニュートンの万有引力論へ

② ジョージ・バークリーの批判

「事物が存在するとは知覚されることである。知覚する心すなわち思考するものの外に、それが存在することは不可能である。」

→ 【物体】のアプリオリの実在を否定

③ デイヴィッド・ヒュームの批判（「われ思う」は「われあり」という結果の原因たりうるか）

原因と結果との必然的結合は、原因から結果へのわれわれの推論の基礎とみなされている。けれども、われわれの推論の基礎は、習慣的結合から生まれた移行である。だから、必然的結合と習慣的結合は同じものなのだ。…必然性は精神のなかに存在する何かであって、対象のなかに存在する何かではないのだ。（『人間本性論』）

→ 【理性】（《われ》）の実在の否定。《われ》は先天的（アプリオリ）なものではない。《われ》でさえ、無数の諸経験の束にすぎない。後天的（アポステリオリ）に得られるもの。「われ思う」のわれと、「われあり」のわれが同一である保証は一切ない。昨日のわたしと今日のわたしとは同じとはいえず、習慣にもとづき、曖昧な一体性をもっているにすぎない。

→ 表象と実在の一致は蓋然的にしかいえず、必然的なものではない。

VI-4 イマヌエル・カント（1724～1804）のコペルニクスの転回

○ エマヌエル・スウェーデンボリ（1688～1772）の心霊体験

幼少期に行っていた故意に息を止める技術を駆使して、霊界（死後の世界）と人間界を自由に行き来するという神秘主義者スウェーデンボリ。彼は地獄を訪れてパウロに出会い、キケロやニュートン、イエスや聖母マリアと邂逅し、1757年に霊界で最後の審判を目撃。1759年、イェーテボリにありながら、ストックホルムで大火が起きていることを見通し、スウェーデンのユルリカ女王とプロシア国王フリードリヒ兄妹の手紙のやりとりを見通す（《スウェーデンボリの千里眼》といわれる）。

→ カントは「視霊者の夢」（1766）というエッセイでスウェーデンボリをあえて真面目に批判しようとするが、彼が行き来する「死後の世界」について、理論的に否定も肯定もできないという結論に落ち着く。

「死者の魂と純粋な霊とはなるほど決してわれわれの外的感官に現在することはできないし、またその上に物質との相互作用の関係にあることもできないが、しかし、それらとともに一つの大きな国家に属する人間の霊に作用することはできるのであって、その結果、それらが人間の内に喚起する表象は人間の夢想の法則に従って類縁的な形像を装い、それらに適合した対象の見せかけを人間の外にあるものとして惹き起こすのである。」

→ カントはあることに気づく。この世界には、自分の論理を受け付けない、「他者」がいる。

○ 『純粋理性批判』（1781）と『実践理性批判』（1788）

コペルニクスの転回：「**対象が認識を規定するのではなく、認識が対象を規定する**」（『純粋理性批判』）。デカルトのような主観的認識（われ思う・表象）と客観的対象（われ在り・実在）の調和ではなく、対象の主観への必然的従

属を説く。《超越論的（先験的）主観》の存在を証明。

But：たんなる主観的観念論ではない。むしろ対象は感覚的な《現象 Erscheinung》と《物自体 Ding an Sich》に分割され、後者は不可知とされる。「我々が認識できるのは、物自体としての対象ではなくて、感性的直観の対象すなわち現象としての物だけである。…我々はこの同じ対象を物自体として認識できないとしても、物自体として考えることはできる」（『純粹理性批判』）。

- 主観的認識と感覚的な対象に加え、不可知の《物自体》を含んだ奥行きのある世界観。《物自体》とは、科学の対象となりうる感覚的な現象の背後にある超感覚的なモノであると同時に、他人の精神。
- 表象は二つに分けられる。感覚できる自然の世界にあらわれて、感性がこれを受けとる《現象》。もうひとつは、感覚できないが、理性が記憶（悟性）から適当にイメージを借りてきて当てはめる《仮象》。神や魔女は、理性がもたらしたもの（理性とは、理解力を越えたもの（物自体）を表象する能力）。

ここに二つの物がある、それは——我々がその物を思念すること長かつしばしばなるにつれて、常にいや増す新たな感嘆と畏敬の念とをもって我々の心を余すところなく充足する、すなわち私の上なる星をちりばめた空と私のうちなる道徳的法則である。…第一のものは、いま私が外的な感性界の中で占めている場所から始めて、私自身をもつないでいる連結の範囲を拡張して、もろもろの世界を超えた彼方の世界や体系の、そのまた体系を包括する測り知れぬ全体的空間に達し、またこれらの世界や体系の周期的運行と、その始まりおよび持続とをうちに包むところの無際限な時間に達するのである。また第二のものは、私の見えざる「自己」すなわち私の人格性に始まり、真実の無限性を備えて僅かに悟性のみが辛うじて跡づけ得るような世界において、私をあざやかに顕示する。そして私は、この世界（しかしまたこの世界を介して、同時に自余いっさいの可視的世界）と私とのつながりが、第一の場合におけるとは異なり、もはや単なる偶然的連結ではなくて普遍的必然的連結であることを知るのである。（『実践理性批判』）

- 世界は、肉体的な経験の世界（自然法則が成立する星の世界）と、精神的な観念の世界（道徳法則が成立する内なる世界）とに分割。人間は、おのれ自身が、おのれを秩序立て限界づけると同時に、おのれの意志で行動する、そうした二つの世界を併せ持った経験的・先験的二重体となる（《有機体》概念の萌芽）。
- 感性の世界と理性の世界とを区別して振り分けるのが《悟性》とされ、重要な役割を担う。人間が犯す誤謬は、理性的な仮象を現象の世界に当てはめようとする（理性の暴走）によって生じる、という。

## VI-5 因果律と自由（オーギュスト・コントの実証主義とハインリヒ・フォン・クライストの嘆き）

カント哲学において、理性のもたらす仮象は四つに大別される。神、不死の魂、宇宙的無限、自由である。その一方で、自由に相反する原因—結果の連鎖からなる《因果律》は、現象の世界において完全に成立しているとされた。

「実際には唯一の時間があるだけで、この時間において相異なる一切の時間が、同時的ではなく相継いで排置されねばならない…一切の変化は原因と結果とを結合する法則に従って生起する」（『純粹理性批判』）。

- 感覚世界において、ニュートン的な決定論的因果律が成立していることを力強く支持する（ようにみえる）もの。しかし、不可知の精神世界を含めたカント哲学に対して、二つの解釈が成立しうる。

### ○ オーギュスト・コント（1795～1857）の実証主義哲学

フランスの在野の学者。空想社会主義者サン・シモンの弟子として出発。のちにサン・シモンのもとを離れ、実証主義 positivisme を創始。神学的な存在論的体制の崩壊以後、種が神学的命名の軛を離れて発展し、進歩・進化を遂げていくことに力を得て、「人間の思索はすべて、必然的に三つの理論段階を順次通過する。すなわち、普通、神学的段階、形而上学的段階、**実証的段階と呼ばれている三つの段階である**」という三段階説を提唱。社会に完全な決定論的因果律を認めるコントは、長足の進歩を遂げる社会のなかでこれを動的に捉え（＝進歩史観）、人類の歴史および自然史をすべて網羅する「諸時代の一覧表」を作成することで、未来の政策を実証主義者たちの決定に委ねようとした。

「決定的な問題、それは神も王も存在することなく社会を再組織化することにはほかならない。」

Systeme de politique positive, 1851

- コントは、カント哲学について、人間が自分自身について語る部分においてのみ因果律を認めたと解釈して高く評価（カントが不可知の《物自体》について指摘していたことは、読解から抜け落ちている）。
- 「社会学 sociologie」の祖。社会を、自由意志を備えた有機的生命と同質のものと捉える《社会有機体説》。  
Cf. ヘーゲル及びマルクスの社会概念、有機体概念
- 晩年は「人類教 la religion de l'Humanite」を創設し、妻クロティルド・ド・ヴォーの遺髪を「物神」と崇めつつ、自らは大司祭となって、世界を一覧表のなかに凍結すべく努めた。

#### ○ ハインリヒ・フォン・クライスト (1777~1811) の嘆き

ドイツの作家。若い頃、物理学に多大な興味を示していたものの、カント哲学（対象は認識に従属し、真の対象たる《物自体》は不可知である……）に触れて、単純かつ明晰な理性にもとづく楽観主義を打ち砕かれ、作家に。最期は極度の貧困のうちにピストル自殺を遂げる。コントと異なり、《物自体》のカントに注目していた。

少し前に私はカントの哲学を知りました——私はあなたに今そこから一つの思想をお伝えします、これが私同様にあなたを深く、痛々しく揺り動かすはしないかと気遣わずに、お伝えしなくてはなりません。——私たちが真理と呼んでいるものが真実に真理であるのか、それとも私たちにただそう見えるだけなのか、私たちはこれを決めることができません。後者ならば、私たちがここに集めた真理は死後にはもうありません。そして、私たちに墓場のなかにまでつき随ってくる所有物を獲得しようとするすべての努力はむなしいものです。——この思想の先端があなたの心臓に当たらなくても、それによって最も神聖な内なるものにおいて深く傷つけられたと感じている他人を笑わないでください。私の唯一の、私の最高の目標は沈んでしまいました、私はもうなにも一つ目標をもっていません。（1801年3月22日姉ヴィルヘルミーネ宛書簡）

#### VI-5 人間の能力を限界づける、カントへの回帰——歴史的因果律の崩壊と言語論的転回

人間の能力を限界づけるカントの重要性は、不可知の《他者》に対する眼差しを回復させることにある。今日高められた他者についての思想の源泉のもっとも大きなもののひとつが、カントにあるとあってよい。しかし、世界についての統一的な視座が失われることによって、未来に対する展望が開けないことも、われわれの世代の厄介な問題となっている。

- カントは「哲学者は、歴史に精通していなければならない」（「世界市民の見地からする一般歴史考」1784）と言っていた。彼のいう歴史の重要性は、事実そのものではなく、外界の事実を認識し、秩序や価値を与える歴史家の側の重要性である。しかし、20世紀後半以降、言語論的転回と呼ばれる潮流のなかで、歴史が歴史家の語る理想や物語、つきつめていえば《言語》にすぎないものとなり、事実と鞏固に結びついたアクチュアルな《歴史像》が崩壊していく。言語論的転回に批判的な今日の実証主義者も、《イメージ》には懐疑的であり、歴史は、なんら未来を指し示さない、因果律から引きはがされたバラバラの「論文」の集積となっている……。
- 「歴史的因果律＝歴史家の物語」とする認識論者たちと、形式主義的な古い歴史的因果律に安住する手続き実証主義者たち。
- 近代的な歴史的因果律にかわる、現実と結びついた新しい《歴史像》は可能かどうか。またそれはどのようなものになるのか。

# VII. 歴史概念の形成——G・W・F・ヘーゲル

## VII-1 カント以後

### ○ 現象と認識のあいだで宙づりとなった近代的人間

《物自体》にたどりつくことはなく、ひとは現象と認識のあいだを行き来するにすぎない。精神と肉体、理想と現実、道徳法則と自然法則、主観と客観のあいだで、分裂した生を送るほかない……。

カント哲学の正しさ……出来事への探究心に決定的な痛撃。出来事と言葉のあいだに打ち込まれた楔。(Cf. クライスト)

⇔シェリング (1775~1854) : 時間のなかで時間を止める、絶対的自我による絶対的統一。A=A という自己同一性の哲学。

### ○ テキストのうちに封じ込められた歴史

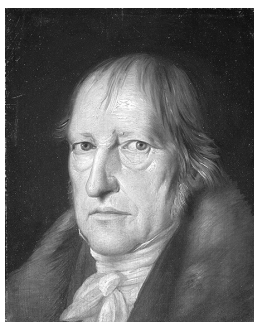
言語論的転回の正しさ……客観的真理——それさえ、じつは西欧合理主義という 19 世紀のイデオロギーの産物にすぎない——を声高に語る歴史家への鉄槌。また、実証主義が客観的真理に至らないのだとすれば、ついに歴史はテキストを弄ぶこととなんら変わらないだろう。

## VII-2 フランス革命とナポレオン

火あぶりにされた魔女や狂人たちは次第に監獄で保護することに代えられ、革命ののち、釈放される（そのなかには有名なマルキド・サド侯爵もいた）。<sup>バステイユ</sup> 牢獄から <sup>サルペトリエール</sup> 病院へと、狂人たちはその場所を変える。哲学はそれまでとは異なる容貌を見せはじめ。神なしに、王なしに、秩序が可能であるとするなら、それはいったいいかなる秩序なのか？ カントのように、理性を限界づける消極的な哲学ではなく、知を、社会に展開するにたるもっと積極的なものとして仕立て上げる必要があった。(Cf. 革命後に書かれたカントの『判断力批判』1790、コントの実証主義哲学/社会学)

- 1806年、当時36歳のヘーゲルは、プロイセンを征服し、イエナに入場したナポレオン(1769~1821)を目撃。彼の最初の著書『精神現象学』(1807)の原稿は、イエナを包囲する軍勢をすり抜けて印刷所へと運ばれている。馬上のナポレオンを「世界精神が馬に乗って通る」と表現している。

## VII-3 カントを乗り越えるヘーゲル



### Georg Wilhelm Friedrich Hegel (1770~1831)

ナポレオンと同世代の人(ナポレオンより一歳年少、ベートーヴェンと同年)として、英雄的な哲学を展開。《ヘーゲル》哲学は、時代を超えて、よくも悪くも真理の参照項だった。戦前はヘーゲルに救いを求め、戦後はヘーゲルという最悪のモンスターとの戦いに費やされた。

- 第二次世界大戦期、ひとびともっとも参照された哲学がヘーゲル。彼の思想は世界にナショナリズムと《全体主義》の嵐をもたらした。

(Cf. 京都学派の「世界史の哲学」/大東亜共栄圏/死の弁証法)

### ○ Neo-Kantianism (1890~1920年代) と Neo-Hegelianism (1920~40年代)

カントの後、ヘーゲルが誕生したように、カント主義のあとに訪れるのは、いつも決まってヘーゲル主義。

- 新カント主義は、人間社会まで自然科学的に説明しようとする、行き過ぎた実証主義や自然主義を批判。「カントに帰れ」の標語のもと、《物自体》や超越論的主観を認めたカントの復権が叫ばれた。
- しかし、カント哲学を越えて、人間社会の統一的な理論が求められるとき、ヘーゲル哲学が復権する。

### ○ カント哲学、ヘーゲル哲学、両者とも、自然主義を批判する

人間もまた自然法則に従属するという「自然主義」は、客観的真理が人間の精神を離れて実在することを前提にしている(19

世紀の自然科学や実証主義)。しかし真の問題は、取り除くことのできない先入観や偏見に塗れた主観を含みつつ、そのうえでいかに真理を探究するかという点にある。

→ 「史実的真理」や「数学的真理」を本質とは直接かかわりのないものと批判。「大切なことは、真理を《実体》としてだけではなく、《主観》としても理解し、表現するということである」(ヘーゲル『精神現象学』序論、1806)。

○ 始まり、そして終わる真理

真理とは、自己自身が生成することであり、自らの終わりを自らの目的として前提し、始まりとし、それが実現され終わりに達したときに初めて現実であるような、円環である。…真理は全体である。だが全体とは自らの展開を通じて、自らを完成する实在のことにほかならない。絶対者について言わなければならない。絶対者が本質的には結果であり、終わりに至って初めて、自ら真に在る通りのものとなる、ということである。(『精神現象学』)

→ 真理とは《全体》であり、始まり、そして終わるとき完成する。

VII-4 知の全体化

カントが分裂したままにした問い……道徳法則と自然法則、人文科学と自然科学、理念と現実、さもなければ精神と肉体。

Cf. 科学的実証主義とフィヒテの絶対的主観主義、シェリングの直観主義 (実体と主観の同一)

→ カント的分裂に対する最初の応答。しかし、主観だけ、実体だけの立場に立つことも、いずれも抽象に過ぎない。

○ カントが提示した不可知の《物自体》をいかにして克服するか

新カント派の不可知論者がやってきて言う。われわれは物の諸性質を正しく知覚するかもしれないが、しかしわれわれはどんな感覚過程または思考過程によっても物そのものをとらえることはできない。この『物自体』はわれわれの認識のかなたにある、と。これにたいしてヘーゲルは、とっくの昔にこう答えている。もし諸君がある物のすべての性質を知るならば、諸君はまた物そのものをも知るのである。そうすると残るのは、この物がわれわれの外に存在するという事実だけである。そして諸君の感官が諸君にこの事実を知らせるとき、諸君はこの物の最後の残りものを、すなわちカントの物自体をとらえたのである、と。(エンゲルス『空想から科学へ』英語版序文)

→ ただし、物に対する知覚は、まだ全体としては《即自的な An sich》なものにすぎない。したがって、物を知覚する意識もまた、An sich のものであり、したがって《精神》たりえていない。★ An Sich……?

VII-5 絶対知への道程——弁証法

弁証法……それまでの古典的論理学を拡張して、ヘーゲルがたどりついた、特異な論理学。

※ アリストテレスの論理学 (古典的推論)

矛盾律 (三段論法) : 論理的同一性 (A = A, あるいは A ≠ A) を前提し、矛盾を取り除いていくもの。「すべての人間は死ぬ」(大前提)、「ソクラテスは人間である」(小前提)、「ゆえにソクラテスは死ぬ」(結論)

○ 主人と奴隷の弁証法 (『精神現象学』)

○ 有と無、生成の弁証法 (『(大) 論理学』)

An Sich	-	Für Sich	-	An und Für Sich
(即自)	-	(対自)	-	(即自かつ対自)
テーゼ (正)	-	アンチ・テーゼ (反)	-	ジンテーゼ (合)

→ すでに否定形にある自己をさらに否定することによって、肯定は実現する。真理は、こうして矛盾を孕みつつ——肯定と否定とを一体のものとしつつ、展開される=Aufhebung (自己疎外とその回収の運動)。

Ex.) 生と死、自由と平等、富める者と貧しき者、男と女、教師と学生、私とあなた、etc...

→ 「実体は、本質的には主観である。」(『精神現象学』)

○ 理性と現実の一致——絶対知

カントにおいて、かつては厳密に区別されねばならなかった理性と現実。ヘーゲルにおいては、否定を孕んだ弁証法的過程を経て、理性は真理を実現する。かくして次のようなことが言われうる——「**理性的であるものこそ現実的であり、現実的であるものこそ理性的である**」(『法哲学』序文)。

- 法はそれゆえ、…とくに合言葉(シボレテ)であって自称国民のいつわりの兄弟、いつわりの味方は、これで区別されるのである。(『法哲学』序文)

## VII-6 歴史主義

### ○ 人類の歴史とは、《闘争》の歴史である

歴史とは、さまざまな弁証法的闘争の行なわれる舞台。弁証法において対立する二つの項(生と死、精神と肉体、男と女、貧者と富者、社会主義と自由主義 etc...)は、社会的現実において、文字通り《闘争/戦争》という形であらわれる。歴史は、これらの闘争の果てに弁証法的統合の結末を用意し、より高次の闘争へとおのれを駆り立てている。

- 混沌 chaos でもなく循環 circles でもない。単線的 line ではなく対立と闘争の spiral としての《進歩》や《発展》の歴史。(Cf. 近代歴史学の父、ランケの《発展》史観)
- 独裁的社会・絶対王政(正) ⇒ 民主的社会・市民社会(反) ⇒ 近代国家(合)

### ○ 歴史家の主観と歴史の客観的事実

歴史とは、それを考察する自分自身も含まれているような——したがってたんなる主観ともたんなる客観ともいえないもの。歴史家の主観と歴史の客観的事実とが繰り広げる葛藤は、歴史家の精神のなかで高次の統一を遂げる。たんに史料に書かれた事実だけで事足りる史実的な(An Sich)歴史であると同時に、歴史を読み解く歴史家自身を含んだ反省的な(Für Sich)歴史であってこそ、歴史である。歴史は、歴史家の精神のなかで、はじめて真の姿を見せる。

- 史料的歴史・事実認識(正) ⇒ 反省的歴史・解釈する歴史家(反) ⇒ 哲学的歴史・《歴史観》(合)
- 東洋の君主制(正) ⇒ ギリシア・ローマの民主制(反) ⇒ ゲルマン的自由社会(合)

### ○ 国家精神

国家とは、個人と集団という二項の弁証法的な過程を経て形成される、巨大な《精神》。それは、人間の意識が、弁証法的な過程を経て、社会に承認されて自己と他者とを含む高次の「精神」となるのと、まったく同じもの。

「即自かつ対自的な国家は倫理的全体であり、自由の実現態である。そして自由を現実のものにするということこそ、理性の絶対的目的なのである。国家は、人間世界のうちに立ってそのなかで意識をもっておのれを実現する精神である。」「国家としての民族は、実体的に理性的であるとともに直接的に現実的である精神であり、したがって地上における絶対的の威力である。だから国家は互いに他に対して主権的に独立している。こうした国家として、他の国家に対して存在することが、すなわち他の国家によって承認されていることが、国家の第一の絶対的な権限である。」「『法哲学』

- 精神とは、国家であり歴史。精神、国家、歴史の三位一体としての《近代》。cf. 国民国家 Nation=State
- 世界精神：「〔世界精神の理念を自覚している〕民族は世界史のなかで、この時代にとっての支配的の民族である、そしてこの民族は世界史の中でただ一度だけ時代を画することができる」『法哲学』。

## VII-7 歴史の終焉(近代は終わるのか、否か)

### ○ 絶対知/ゴルゴダの丘

「哲学がその理論の灰色に灰色を重ねて描くとき、生の一つの姿はすでに老いたものとなっていて、灰色に灰色ではその生の姿は若返らされはせず、ただ認識されるだけである。ミネルヴァのふくろうは、黄昏がやってくるとき初めて飛び始める。」「『法哲学』

- 歴史の終焉(フランシス・フクヤマ)：冷戦の終わり=闘争の終わり=歴史の終わり。
- 絶対知は、歴史の死において達成される。